



Title	Relationship in Japan between maternal grandmothers' perinatal support and their self-esteem
Author(s)	Iseki, Atsuko
Citation	大阪大学, 2013, 博士論文
Version Type	
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/26288">https://hdl.handle.net/11094/26288</a>
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、<a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">大阪大学の博士論文について</a>をご参照ください。

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## 論文内容の要旨

### [題名]

里帰り分娩と祖母の精神的健康に関する研究 -自尊感情およびうつ傾向との関連-

学位申請者 井關敦子

### [目的]

祖母は育児支援資源として期待され、その支援のひとつに里帰り分娩がある。里帰り分娩の利点として、産褥期の心身の回復、産後うつの予防、育児技術の向上があるが、欠点として、母親役割獲得遅延、母親の自立の遅れ、世代間の育児方針の衝突などが指摘されている。祖母は里帰り分娩での重要なキーパーソンであるにもかかわらず、祖母にとっての里帰り分娩の意義は十分に検討されていない。

長寿、健康感、身体活動性は、高齢者の自尊感情と関連がある。また、自尊感情は、自己効力感、QOL、抑うつとも関連がある。女性の中高年はうつの好発年齢であるが、援助行動は援助者の自尊感情を向上させ抑うつを低減させる。つまり、娘の里帰り分娩時の祖母による援助行動は、祖母自身の精神的健康度（自尊感情、うつ傾向）を向上させる可能性がある。また、里帰り分娩の実態は支援を行う祖母の視点からも検討する必要がある。本研究では、里帰り分娩と祖母の精神的健康度との関連について検討する。

### [本研究で使用する心理尺度]

研究Ⅰ・Ⅲでは、自尊感情の測定にはローゼンバーグ自尊感情尺度日本語版（RSES-J）、うつ傾向の測定にはCES-D日本語版を使用した。

### [用語の定義]

研究Ⅰ～Ⅲでは中年期は40歳から59歳、高年期は60歳から79歳と定義する。娘とは出産した女性、祖母は出産した女性の実母と定義する。

### [方法並びに結果]

#### 1. 研究Ⅰ

RSES-Jの中高年女性での精度の検討、中年期と高年期の精神的健康度（うつ傾向、自尊感情）の実態と世代間の差の検討を目的に、M県T市婦人団体会員の中高年女性を対象に質問紙調査を実施した。自記式質問紙を280名に配布し252名から回答があり（回収率90.0%）、CES-DとRSES-Jに完全回答であった207名（平均 $61.0 \pm 6.8$ 歳）を分析した（有効回答率73.9%）。RSES-Jのデータを探索的因子分析した結果、累積寄与率は47.2%、尺度全体のα係数は0.793であった。またRSES-JとCES-Dとの相関係数は-0.534 ( $p<0.01$ ) であった。以上のことからRSES-Jの信頼性と妥当性が確認された。中年期と高年期の比較では、うつ傾向、自尊感情とともに2群の差はなかった。中年期でうつ傾向と関連するものは、趣味・ボランティア活動であった。自尊感情とうつ傾向は関連があり、その関連の程度は中年期のほうが高年期より強かった。加齢は喪失を伴う過程であるが、高齢者は喪失に代るもの（責任感・役割からの解放）を獲得していると考えられる。中年期にとって、趣味・ボランティア活動という他者との肯定的交流は精神的健康にプラスとなる重要な因子である。

#### 2. 研究Ⅱ

祖母の立場から里帰り分娩の実態を明らかにし里帰り分娩の問題点を検討するため、娘（初産婦）の産後の世話をした祖母を対象に、1か月健康診査時に半構造化面接を実施した。研究Ⅱでは、「里帰り分娩とは、出産前後に実

家に戻った娘が祖母から支援を受け、3週間以上実家に滞在すること」と定義した。面接は、里帰り期間中の「娘に対する祖母の支援姿勢」と「支援を行う中で体験した思い」に関する内容であった。祖母21名（平均 $54.2\pm5.4$ 歳）から得たデータは録音またはメモに残し逐語録とし、類似したものをまとめ質的帰納的に分析し、最終的に【カテゴリー】とした。娘に対する祖母の支援姿勢は、【娘の心身の安楽をはかる】【娘（夫婦）の育児を見守る】【自身の育児能力を見極め娘に必要なサポートを判断する】に集約された。また、支援を行う中で体験した思いは、【持続または再開する母親役割】【低い自己評価と役割葛藤】【娘との不協和音】に集約された。祖母の支援姿勢は、先行研究で指摘されているような里帰りの問題点に直結するものではなく、むしろこの問題を回避するものであった。また、祖母は母親役割の再開という肯定的な思いとともに、低い自己評価や役割葛藤などの否定的な思いも体験していた。里帰り分娩の問題点は祖母の視点でも検討されることが必要であり、看護職は祖母の否定的な思いにも関心を向ける必要がある。

### 3. 研究III

分娩前後の娘に対する祖母の支援形態と精神的健康度（うつ傾向、自尊感情）との関連を検討するために、祖母に対して2回の質問紙調査（1回目：娘の妊娠28週以降 2回目：娘の産褥12週以内）を行った。妊娠中の娘を介して、祖母600名に2回分の質問紙を1度に手渡し法または郵送法で配布した。回収は郵送法で、産前産後ともに回収されたのは237名（回収率39.5%）、そのうち心理尺度に完全回答かつ調査期間内に回答があった198名（平均 $57.0\pm5.3$ 歳）を分析した（有効回答率33.0%）。研究IIIでは、支援あり（①産前から実家②産後から実家③産後から娘宅）と支援なしに分類し、特に①産前から実家群を「里帰り分娩」と定義した。祖母の社会的背景のうち、支援の有無と関連があったのは娘の出産歴であった。祖母全体では、産前産後で自尊感情、うつ傾向ともに変化はなかった。しかし①産前から実家群では、産後有意に自尊感情が低下し、その低下は中年期祖母の低下が原因であった。中年期の特徴として、高年期よりも就業者が多く、趣味・ボランティア活動が少なく、介護が必要な家族がいる者の割合が高い。この状況に、①産前から実家（里帰り分娩）と言う条件が加わると、さらに多重役割となり負担感が増え、自尊感情の低下をきたしたと考えられる。

#### 〔研究の総括〕

本研究より以下のことが明らかになった。

- 1) RSES-Jはその精度が確認され、中高年女性を対象とした使用は可能であった。中年期女性と高年期女性の比較では、うつ傾向、自尊感情ともに差はなかった。中年期において趣味・ボランティア活動をする者はうつ傾向が小さかった。うつ傾向と自尊感情は有意な関連があり、その関連は中年期に強かった。
- 2) 祖母は、里帰り分娩に伴う問題を回避する支援姿勢を持っていた。里帰り分娩は、祖母の母親役割が再開し、祖母は肯定的な思いとともに、低い自己評価や役割葛など否定的思いも持っていた。
- 3) 祖母全体では、産後支援の有無は祖母の精神的健康度と関連していなかった。しかし、中年期で産前から実家（里帰り分娩）群は、産後有意に自尊感情が低下していた。

#### 〔今後の課題〕

祖母全体では里帰り分娩は精神的健康度と関連がなく、祖母のうつ予防の可能性があるとは言えない。また、中年期祖母にとって、里帰り分娩は多重役割となり、自尊心を低下させる可能性がある。この現状に対して、中年期祖母が就業しているあるいは実家に要介護者がある場合は、産前から実家（里帰り分娩）で支援するよりも、産後からの支援が選択肢として提案できる。里帰り分娩では祖母に負担が集中しないよう、家族全員が支援に参加する産前教育が必要である。

## 論文審査の結果の要旨及び担当者

氏名(井関 敦子)	
	(職) 氏名
論文審査 担当者	主査 教授 大橋一友 副査 教授 鳥田三恵子 副査 教授 渡邊浩子

## 論文審査の結果の要旨

祖母は育児支援資源として期待され、その支援のひとつに里帰り分娩がある。里帰り分娩の利点として、産褥期の心身の回復、産後うつの予防、育児技術の向上があるが、欠点として、母親役割獲得の遅延、母親の自立の遅れ、世代間の育児方針の衝突などが指摘されている。

本論文は、里帰り分娩と祖母の精神的健康との関連について検討する、3つの研究から構成されている。

## I章：里帰り分娩をした娘に対する支援姿勢と支援を通じて体験した思い

祖母の立場から里帰り分娩の実態を明らかにし里帰り分娩の問題点を検討するため、里帰り分娩を行った初産婦（娘）の実母（祖母）21名を対象に、1か月健康診査時に半構造化面接を実施した。娘に対する祖母の支援姿勢は、【娘の心身の安楽をはかる】【娘（夫婦）の育児を見守る】【自身の育児能力を見極め娘に必要なサポートを判断する】に集約された。また、支援を行う中で体験した思いは、【持続または再開する母親役割】【低い自己評価と役割葛藤】【娘との不協和音】に集約された。祖母は母親役割の再開という肯定的な思いとともに、低い自己評価や役割葛藤などの否定的な思いも体験していた。

## II章：中高年女性のうつ傾向と自尊感情との関連

自尊感情尺度であるRSES-Jについて中高年女性における汎用性の検討、中年期（40歳から59歳）と高年期（60歳以上）の精神的健康度（うつ傾向、自尊感情）の実態と年齢による差異を検討した。質問紙を280名に配布し252名から回答があり（回収率90.0%）、RSES-Jとうつ傾向尺度であるCES-Dに完全回答であった207名（平均61.0±6.8歳）を分析した（有効回答率73.9%）。RSES-Jのデータを因子分析し、累積寄与率は47.2%、尺度全体のα係数は0.793であり、RSES-Jの信頼性が確認された。中年期と高年期の比較では、うつ傾向、自尊感情ともに2群の差はなかった。

## III章：娘への産後支援と祖母の精神的健康との関連

出産前後の娘に対する祖母の支援形態と精神的健康度（うつ傾向、自尊感情）との関連を検討するためには、妊婦（娘）の実母（祖母）に対して縦断的に質問紙調査（1回目：娘の妊娠28週以降 2回目：娘の産褥12週以内）を行った。妊娠中の娘を介して、祖母600名に2回分の質問紙を手渡し、質問紙に完全回答かつ調査期間内に回答があった198名（平均57.0±5.3歳）を分析した（有効回答率33.0%）。娘への支援をした祖母が176名（88.8%）、支援をしなかった祖母が22名（11.1%）であった。祖母の社会的背景のうち、支援の有無と関連があったのは娘の出産歴で、初産婦は経産婦よりも支援を受ける割合が高かった。支援の方法を3群に分類し（①産前から実家で支援群 ②産後から実家で支援群 ③産後から娘宅で支援群）、この3群と④支援なし群を含めた合計4群で分析を行った。祖母全体では、産前産後で自尊感情、うつ傾向ともに変化はなかった。しかし①産前から実家で支援群では、産後有意に自尊感情が低下し、その低下は中年期祖母で見られ、高年期祖母では見られなかった。中年期祖母の特徴として、高年期祖母よりも有職者が多く、介護が必要な家族がいる者の割合が高かった。これらの社会的背景に、産前から実家での娘への支援が加わると、祖母の負担感が増加し、自尊感情の低下をきたしたと考えられた。

以上の結果は、日本の伝統的な育児支援である里帰り分娩が祖母の重荷になる場合があり、40歳から59歳の祖母では産前からの実家での支援が自尊感情の低下と関連することが示された。

本研究は、現代日本社会での育児支援を考えるうえで重要な知見であり、博士（看護学）の学位授与に値するものと考える。